NEWSLETTER No. 27



Church World Service

2018年10月号

バングラデシュにおける草の根イノベーションの視察報告

9月16日から2日間にわたり、Asian Disaster Reduction and Response Network (ADRRN) *1 の加盟団体であるDhaka Communicty Hospital Trust (DCHT) が主催するイノベーションラボの中間報告会に参加しました。このラボにはバングラデシュ全国から選ばれた12チームの市民イノベーターが所属しており、それぞれスラムや農村部における主に災害に関わるの課題の解決を目指しています。今回は事業の開始から約3か月が経過したことを踏まえ、本活動を支援するSTART Network*2 に対するこれまでに行った活動と現在抱えている課題についての共有がありました。

選ばれた12のプロジェクトはそれぞれ個別のテーマに取り組んでいます。例えば、「スラムで頻発する火災にどう対処するか」という課題に対し、あるイノベーターはお店の店主や若者など日中スラムにいる人々からなるボランティアグループを組成して火災の予防啓発、火災発生時の対処方法などを住民に普及するアイデアに取り組んでいます。また、別のイノベーターは、バングラデシュでは薬剤師の資格制度が存在しないため、「スラムで営業する薬剤師は病気やケガ、販売する薬について正しい知識を有していない」ことに着目し、薬剤師に対する講座を実施することで病気やケガに対する適切なアドバイスを行えるようになるよう取り組んでいます。

支援団体であるSTART Networkからは、こうしたプロジェクトは一見すると別々の課題に取り組んでいるようですが、ボランティアチームと薬剤師が連携することで火災の被害者に対していち早く応急処置をすることで住民の死亡や大ケガを防ぐというような連携が可能であるなど、視野を広げて連携することの重要性が指摘されました。

また、すべてのチームに共通して言えることとして、 (持続性を担保する仕組みという意味での) ビジネス モデルを考える必要があるというコメントも多く聞か れました。

CWS JapanはADRRNのイノベーションハブとしてこうしたADRRNメンバーのイノベーションに関する活動を他のメンバー団体にも共有し、拡散することを目的に参加しましたが、市民自身がこうしたイノベーション活動に主体的に関わることが本当の意味で課題と向き合うことではないかと感じました。また、こうした取り組みを支援するうえで、市民イノベーターが持つ知識や経験は重要であり、しかし他方で外部専門家やパートナーの協力は不可欠であると改めて感じました。

(文:事務局次長 打田 郁恵)



首都ダッカのKorailスラム内にあるカフェにて イノベーターの説明を聞く

*1 ADRRN:

20か国56団体から構成される災害支援NGOのネットワーク。CWS Japanは準会員として加盟しており、ADRRNイノベーションハブのホスト団体でもある。 *2 START Network:

世界の人道支援NGO42団体が運営するネットワーク 団体。DCHTのようなローカルNGOに予算を配分し、 人道分野のイノベーションを積極的に支援している。

西日本豪雨被災者支援 YMCAせとうちリフレッシュキャンプ報告

「被災して写真などの思い出も全部なくなってし まい、新たにこのような形で思い出を作ってもらえる ことができて本当にありがたいです。 I これは、今夏 の西日本豪雨で被災し、9月に開催したYMCAせとうち リフレッシュキャンプに参加した小学生の保護者から いただいた声です。CWS Japanでは、7月の豪雨に よって最も被害が大きかった岡山県倉敷市真備町の被 災者支援をパートナー団体とともに行ってきました。 その支援活動の一つとして、被災世帯の子ども達(小 学生)40人をYMCAせとうちのリフレッシュキャン プ・プログラムに9月の連休を使って招待することにな りました。CWS JapanとYMCAとの連携は、東日本大 震災から始まり、これまで福島第一原発事故の影響を 受けた子ども達のための保養キャンプ、熊本地震で被 災した子ども達のためのリフレッシュキャンプと行っ てきました。そして今回は、真備町の子ども達のため に、YMCAせとうちとの連携が決まりました。

豪雨災害から2カ月が過ぎた真備町を訪れてみると、道路沿いの土砂などは片付けられてはいるものの、町全体が人気がなく閑散とし、その状況を見ると、復興への道のりの遠さを感じました。真備町の子ども達にとって、今年の夏休みは、学校の友達は皆町外に避難し、バラバラになったために、どこにも遊びに行けず、辛い夏を過ごしました。そんな子ども達が親元を離れ、3日間、小豆島の無人島である余島のキャンプ施設に滞在し、素晴らしい自然の中で思いっきり遊びま



海でタコを捕獲した子ども達

した。3日後、ある小学生は帰宅するなり、「**夢のよ** うな時間だった」と家族に言ったそうです。その言 葉から、子ども達にとってどれだけ楽しいキャンプ だったかが分かります。子ども達は、2泊3日のキャ ンプ・プログラムの中で、グループで身体を使った ゲームを楽しみ、キャンプ・ソングを歌い、シーカ ヤックやアーチェリーなど、生まれて初めて体験す るようなスポーツにも挑戦しました。全て、野外で 身体を使って仲間達と楽しむ活動ばかりです。それ まで避難生活のために屋内で独りでゲームをして過 ごしていたことを考えると、確かに夢のような子供 天国の生活でした。また、子ども達からのリスクエ ストで、当初のプログラムには組まれていなかった タコ獲りも経験しました。目の前の海で生きている タコを捕まえ、自分達で料理して食べるタコは格別 です。「今までこんなにおいしいタコは食べたこと **がありません。**」と、どの子ども達の感想にもタコ 獲りの思い出が綴られていました。

「今年初めての海と初めてやった釣り、そして 釣るコツも分かって、色々な経験ができてうれし かったです。3日間で帰るのが寂しかった!」

こんな夢のような3日間は終わって、皆、それぞれ現実の生活に戻り、日常が続いています。微力ではありますが、彼らがこの経験を糧に希望を持って、また前に向かってくれることを祈っています。

(文:プログラムマネージャー 牧 由希子)



参加した子ども達と余島のキャンプ施設にて集合写真